

# 谷崎潤一郎における『源氏物語』

吉仲聖沙

はじめに

谷崎潤一郎と『源氏物語』の関係ですぐに思い浮かぶのは、いわゆる〈谷崎源氏〉と呼ばれる『源氏物語』の三度の訳業である。〈谷崎源氏〉はそれぞれ長い年月を費やして書かれた。<sup>1)</sup>これだけの長い物語を手がけるには、かなりの労力を要すると思われる。「とても生きていた間には書ききれない」とこぼすほど創作意欲にあふれていた谷崎が、これだけの年月や労力を費やして『源氏物語』に取り組んだのはなぜなのか。

『源氏物語』の現代語訳は谷崎潤一郎に限らず、与謝野晶子や円地文子、瀬戸内寂聴なども手がけており、この三人は形は違うが複数回行っている。他にもいくつもの訳業がある

が、『源氏物語』の現代語訳に取り組む姿勢や動機は、それぞれ違っているだろう。

谷崎については、『源氏物語』の現代語訳のみならず、『源氏物語』に取材した歌詞を書き、自身の作品にも『源氏物語』の影響が指摘されている。『源氏物語』への深い傾倒がうかがわれるが、一方で、絶筆で残した『にくまれ口』での批判があり、『源氏物語』に取り組む姿勢に疑問を投げかけている。

『にくまれ口』での批判を分析し、『文章読本』など、『源氏物語』に多く触れている著作、そして〈谷崎源氏〉での現代語訳の姿勢を取りあげて、『源氏物語』に向けた谷崎の想いの片鱗を探ってみたい。

一 『にくまれ口』での光源氏批判

谷崎が『源氏物語』に対し、自分の意見・感想を述べている随筆として『にくまれ口』があげられる。これは一九六五（昭和四十）年の『婦人公論』に、谷崎死去の後に掲載された。

千葉俊二編『谷崎潤一郎必携』<sup>(2)</sup>では以下のように説明されている。

〔内容〕『源氏物語』の現代語訳を三回手がけた谷崎が『源氏』に対する不満を語った随筆。『源氏』は「物のあはれ」を書いたものであるから「是非善悪」をもって読むべきではないとする本居宣長の説に賛同しながらも、光源氏の女癖の悪さや不義の数々には同情できず、また作者紫式部が源氏最良であることにも反感を覚えるという。しかし、一方で『源氏』に及ぶ物語はないと、物語全体としての「偉大さ」に賛辞をおくる。

〔評価〕「フェミニスト」を自称する作者の光源氏批判。遺稿として発表されたもので、『源氏物語』と谷崎文学との根本的な問い直しを迫る重要論文。

『にくまれ口』は、谷崎の小説である『鍵』の英訳を担当

したハワード・ヒベットとの談話の中で、話が『源氏物語』におよび、アメリカの学生は一般的に紫の上が好きで、光源氏はあまり好かれていないという趣旨の話になった、ということから始まる。

ヒベットとの談話については、伊吹和子の『われよりほかに―谷崎潤一郎最後の十二年』<sup>(3)</sup>に詳しい。伊吹によると、この談話は一九六四（昭和三十九）年十月二十九日に、「新々訳」の第一巻の付録のために行ったもので、このときの谷崎の様子を次のように記している。

〔前略〕光源氏という人間は、あまり好かないんです。今度一べん、それを書いてみようかと思ってるんですがね―

という部分がある。『にくまれ口』の文面にも、かなりムキになったような表現があるが、対談中の先生の語調には、こんな不条理なことがあるものか、といった強い憤慨の響があった。

『にくまれ口』の文面を見る限りでは、ヒベットとの談話がきっかけのように取れるが、この文章によると、それ以前から光源氏への批判を文章にしようと考えていたようである。また、『にくまれ口』の文面だけでは捉えられない、光源氏

への反感も知ることができる。

『にくまれ口』での光源氏批判の内容は、光源氏の女性に対する態度への非難が多い。

空蟬と初めて出会ったにも関わらず、「年ごろ思いつづけていた」といって口説くのは、「女を口説く常套語であるが高貴に育った、未だ世慣れない筈の青年の言葉として、あまりいい感じを持つわけにはいかない」と、嘘をついて女性を口説こうとする態度のことや、これらの行為が藤壺という「重大な女性」を想いながらのことで、いかに時代が違っていても、目にとまった女性にいても簡単に口説き文句が出ることは、「藤壺というものを甚だしく侮辱する」ことなどが挙げられている。

また、須磨に流された光源氏が、自分は罪もない身と言ったこと、亡くなった桐壺帝が源氏を責めずに朱雀院の夢に現れて叱ったことをあげ、「源氏の身辺について、こういう風に意地悪くあら捜しをしたら際限がないが、要するに作者の紫式部があまり源氏の肩を持ち過ぎていいるのが、物語の中に出てくる神様までが源氏に遠慮して、依怙虫貞をしていられるらしいのが、ちよつと小癪にさわる」など、紫式部にも難色も示している。

以上のように『にくまれ口』では、光源氏への強い批判と、紫式部への不満を顕わにしている。ヒベツトとの談話の内容も、「新々訳」の付録を確認する限り、ほぼ同様のものだったようである。(谷崎源氏)が広く読まれていたこともあって、このような谷崎の批判は世間をとまどわせた。

谷崎が自分の随筆などで『源氏物語』に対する批判的な意見を述べるのは初めてであったが、前述した著書の中で伊吹は、光源氏に対する批判を「たびたび聞かされていた」と記している。

実は、この類の話は、昭和二十八年の潺湲亭での『新訳』の筆記の最中から、私はたびたび聞かされていた。筆記は、ちよつど「柏木」の巻に入っていたから、光源氏は若い時のような不埒な人間ではなくなり、正妻女三宮と目をかけていた柏木との密通、という事態に直面して苦悩する悲劇の人物に変わっていた。それでも先生は、やはり、

「どうも、源氏つてのはいやな奴ですね。自分だつてお父さんを裏切つて、藤壺に冷泉院を産ませたんだから、柏木を許してやりやいいのに、うわべは親切そうな顔をしながらしつこく意地悪をするんだからね、だから京

都の人間は嫌いなんだ」

と、憎らしそうにおっしゃった。

伊吹によると、谷崎の光源氏批判は、少なくとも「新訳」のころからなされていた、ということであるが、谷崎松子は、「源氏余香」<sup>1</sup>において、「最初の訳の頃にはそう云うことは耳にしなかった」こと、「言葉にしたのは新々訳を終えての感想」であったことを明らかにしている。

「源氏余香」には、谷崎が正直さにこだわる性質であったこと、女性の遍歴は確かにあっても、松子夫人への愛情の示し方は誠実そのものであったこと、なども記している。谷崎自身もそれを自負していたからこそ、藤壺という女性を想いながらも、別の女性を平気で口説こうとする光源氏と同類のように見られたくなかったのではないか。ここまで憤慨して光源氏を批判する理由は、自分の女性への態度と、光源氏のプレイボーイぶりとをいっしょにされたくないからであらう。

しかし、それを同じもののように周閑が言うため、谷崎としても強固に否定せざるをえなかったのではないか。『源氏物語』に関わるようになった谷崎と、光源氏との共通点を周閑が指摘するようになったことが、『にくまれ口』での反発

に繋がったと推測できる。

以上のように、『にくまれ口』の批判内容は光源氏へ向けられたものであり、『源氏物語』全体への批判ではない。批判内容が紫式部に及んでいるが、それも光源氏寄りであることが根本であろう。

## 二 『源氏物語』の評価

『にくまれ口』では、光源氏批判とは別に、『源氏物語』そのものについては高く評価している。

あの物語を全体として見て、やはりその偉大さを認めない訳には行かない。昔からいろいろの物語があるけれども、あの物語に及ぶものはない、あの物語ばかりは読む度に新しい感じがして、読む度に感心するという本居翁の賛辞に私も全く同感である。

また統いて、鷗外が以前、『源氏物語』の文章を「悪文」であるかのように言ったのに対して、『源氏物語』の文章と、鷗外の文章は質の違うものであったためだとしている。

昔鷗外先生は「源氏」を一種の悪文であるかのように言われたが、思うに「源氏」の文章は最も鷗外先生の性に合わない性質のものであったのであろう。一語一語明確で、

無駄がなく、ピシリピシリと象眼をはめ込むように書いて行く鷗外先生のあの書き方は、全く「源氏」の書き方と反対であったと言える。

鷗外の批判に対して、このような擁護の姿勢を見せるのは初めてではない。一九三四（昭和九）年十一月に中央公論社から出版された『文章読本』の中でも同様に、鷗外の批判を取り上げている。

「同書の中では、鷗外の文章を「漢文的」、「源氏物語」の文章を「和文的」であるとし、質の違う文章であるため、鷗外には合わなかったのだという。

また同書では次のように記されている。

我が国の古典文学のうちでは、源氏が最も代表的であります。故に、国語の長所を剩すところなく発揚してゐると同時に、その短所をも数多く備へてをりますので、男性的な、テキパキした、韻のよい漢文の口調を愛する人には、あの文章が何となく歯切れの悪い、だら／＼したもの、やうに思はれ、何事もはつきりとは云はずに、ほんやりぼかしてあるやうな表現法が、物足らなく感ぜられるのでありませう。

谷崎は、『源氏物語』の文章を「古典文学の代表」である

とし、「国語の長所を剩すところなく発揚してゐる」文章であるとす。『源氏物語』の文章を褒め称えながらも、見方によっては、その長所が短所と捉えられることも示している。谷崎の指す「国語」とは、「和文的」なものと、「漢文的」なものには二分されている。この二つの別の呼び方として「和文的」な文章を「源氏物語派」、「漢文的」な文章を「非源氏物語派」とし、『源氏物語』は「和文的」な文章のうちでの代表と位置づけている。

また、自分自身も「文章は甘口、先づ源氏物語派の方」であり、「若い時分には漢文風な書き方にも興味を感じ」たが「だん／＼年を取つて自分の本質をはつきり自覚するに従ひ、次第に偏り方が極端になつて行くのを、如何とも為し難いのであります」と語っている。『源氏物語』の文章は谷崎自身の文章の好みと一致しているという。

『源氏物語』の文章については、「旧訳」の出版に際して一九三八（昭和十三年）二月号『中央公論』に発表された「源氏物語の現代語訳について」の中で、次のように記している。

あの原文が持つてゐる魅力は、何よりも「色気」といふことにあると思ふ。実に源氏は不思議に色気のある文章

である。色気といふ点では、これを後にしては西鶴物、前にしては源氏、この二つがわれわれの古典の中で傑出してゐる。源氏が、他の多くの王朝の物語類の中で断然光つてゐる所以の一つは、此処にあるのではないか。

谷崎は『文章読本』など多くの著作で、『源氏物語』の文章のよさについて取りあげてゐるが、特に『源氏物語』の描写の艶つぽさ、「色気」のある文章に関心を寄せていたようである。『源氏物語』が他の古典よりも輝く理由の一つとしても、「色気」をあげてゐる。

また、続けて「旧訳」の文章にも「色気」を再現しようとしていたことを記してゐる。

されば私は、現代語に移すに当たつて、出来るだけその色気を失はないやうに心を用ひた。それがどの程度に成功してゐるかは識者の批判を待つより外はないが、さうするためには原文のあの曖昧さ——間接な、むき出しでなく、幾様の意味にも取れるやうな含みのある物の云ひ方、——を、踏襲することが必要であつた。原文ほど大胆な省筆はなし得ないにしても、原文が十のものを五で云ひ表はしてゐるとすれば、私はそれを七で云ひ表はすくらゐにはした。

「旧訳」を執筆する際には、「色気」を出すために、「曖昧さ」「幾様の意味にも取れるやうな含みのある物の云ひ方」を踏襲したという。

谷崎は「色気のある文章」を『源氏物語』から感じとり、自身の現代語訳という作業に取り入れようとしていた。では、「色気」のある文とはどのようなものなのか。

### 三 『源氏物語』の文章

一九五一（昭和二十六）年四月号『中央公論』で発表された「源氏物語新訳序」（原題「源氏物語の新訳について」）では、「旧訳」に対して、次のように記してゐる。

苟くも原文の色、匂、品位、含蓄等を伝へようとする文学的翻訳であるからには、私の選んだあの文体に勝る文体はあり得ないものと、心中自負してゐたのであつた。尤もあの文体では、原文のもつ流麗さは伝へられるにしても、簡結さを伝えることは不可能であつたが、それはいかんとも仕方がなかつた。

「旧訳」の文体は「原文の色、匂、品位、含蓄等を伝えようとする文学的翻訳」であり、谷崎自身、「旧訳」の現代語訳の作業でそれを充分にこなせたという自負があつた。しか

し、「流麗さ」と「簡結さ」を現代文で両立することは出来ず、やむをえなく「流麗さ」を重視したという。

「流麗さ」がどのようなものかについては、やはり「文章流本」で語られている。谷崎は、文章の中でも特に個人差、その人の性質が現れるものとして「調子」をあげ、代表的事例をあげつつ説明している。その中の「流麗な調子」で、『源氏物語』の文体を例にあげている。

これは、前に申しました源氏物語派の文章がそれでありまして、すらくくと、水の流れるやうな、何処にも凝滞するところのない調子であります。此の調子の文章を書く人は、一語々々の印象が際立つことを嫌ひます。さうして、一つの単語から次の単語へ移るのに、そのつながり工合を眼立たないやうに、なだらかにする。同様に、一つのセンテンスから次のセンテンスへ移るのにも、境界をぼかすやうにして、何処で前のセンテンスが終り、何処で後のが始まるのか、はじめを分からなくするのであります。

谷崎は「流麗な調子」の具体的な事例として、「須磨」の巻の冒頭部分をあげている。

かの須磨は、昔こそ人のすみかなどもありけれ、今はい

と里はなれ、心すこくて、海人の家だに稀なむと聞き給へど、人しげく、ひたたけたらむ住ひは、いと本意なかるべし。さりとて都を遠ざからむも、古里覚束なかるべきを、人わろくぞ思し乱る。よろづの事、きし方行末思ひつゞけ給ふに、悲しき事いとさまぐなり。

谷崎は以上の文章を、「かの須磨は」から始まって「いと本意なかるべし」までが一つのセンテンスのように見えるが、その次の行の「思し乱る、」までを光源氏の胸中の感慨であるから、「いと本意なかるべし。」の箇所は、形の上では切れているものの、気持ちの上では切れているとは言いがたく、そうしてみると、この文章は全てが一つのセンテンスとしてみることも出来る、と説明する。

「流麗な調子」というのは、このようにセンテンスの区切れが特定できない文章であるといえる。単語と単語、センテンスとセンテンスの区切れが曖昧なため、ぼやけた調子になる。「漢文的」なピシリとした調子とは逆の調子と言える。一語の印象を強くすることよりも、なだらかな流れで読ませる文章ということであろうか。

しかし、この文章を綴るためには、それなりの技巧が必要であるとし、「須磨」の巻のなだらかな調子を失わないよう

に現代語訳を施した文章も例にあげている。また、現代語訳の際によく見られる例もあげて、「流麗さ」とはどのようなものかについて説明している。

まずは「流麗さ」を残し、現代語訳した文章があげられている。

あの須磨と云ふ所は、昔は人のすみかなどもあつたけれども、今は人里を離れた、物凄い土地になつてゐて、海人の家さへ稀であるとは聞くものゝ、人家のたてこんだ、取り散らした住まひも面白くない。さうかと云つて都を遠く離れるのも、心細いやうな気がするなどときまりが悪いほどいろいろにお迷ひになる。何かにつけて、来し方行く末のことゝもをお案じになると、悲しいことばかりである。

次に、「現代語訳でよくある例」があげられている。傍線部分は谷崎によるものである。

あの須磨と云ふ所は、昔は人のすみかなどもあつたけれども、今は人里を離れた、物凄い土地になつてゐて、海人の家さへ稀であると云ふ話であるが、人家のたてこんだ、取り散らした住まひも面白くなかつた。しかし源氏の君は、都を遠く離れるのも心細いやうな気がするので、

きまりが悪いほどいろいろに迷つた。彼は何かにつけて、来し方行く末のことを思ふと、悲しいことばかりであつた。

二つの例文はそれぞれセンテンスを意識して、谷崎が現代語訳したものである。

谷崎自身は、「現代語訳でよくある例」には、「流麗さ」を残した文章と比べ、「イ・敬語を省いたこと、ロ・センテンスの終りを「た」止めにしたこと、ハ・第二第三のセンテンスに主格を入れたこと」という相違があるとまとめている。そして、「流麗さ」を残した文章には、主語を省くように心懸けている。主語を入れることでセンテンスの区切れが際立つため、これらを防ぐために敬語を使用している。「お迷ひ」「お案じ」という言葉で、光源氏の心情を語っているのだと知られる。敬語を使用することで主語を明記する必要がなくなる。「現代語訳でよくある例」では、光源氏に対して敬語を使用していないため、主語を明記していないと動作主が特定できない。

また、谷崎は、現代文ではセンテンスの最後に「た」「る」「だ」をよく使うことを指摘し、これらの音が続くと単調になり、センテンスの終わりが目立ち、音そのものも強い響き



を残すという。「現代語訳でよくある例」では、「なかつた」「迷つた」「あつた」と続き、終わりの音の印象を強めている。終わりの音を強めることで、センテンスの区切れを明確にしている。「流麗さ」を残した文では、同じ音を連続して使用することを避けるようにしているのである。

さらに「現代語訳でよくある例」では「かつた」という過去の言い回しを使っていること、主語を明記していることで、語り手の視点が俯瞰的な位置にあるように感じられ、客観的なニュアンスとなっているのに対し、「流麗さ」を残した文章では、過去の言い回しはせず、主語も明記されていないため、語り手の視点が光源氏に近く感じられる。主観的とまではいかないまでも、語り手の心情が、光源氏の心情に、より深く寄り添っているかのように感じられる。

『源氏物語』の原文の調子を表現しているという点では、「流麗さ」を残した文章が優れていると言える。しかし、谷崎は「現代語訳でよくある例」のような文を悪文とするわけではなく、関係代名詞がない「日本文」でも、いくらでも長い文章を綴ることが出来るし、その美点を力説したいという。さらに『源氏物語』をはじめとする「古典文」について、次のように記している。

畢竟斯くの如き文章にはセンテンスの切れ目がない、全体が一つの連続したものであると考へるのが至当であります。それを、西洋流の文法の頭で幾つかのセンテンスに分けようとすれば、いろ／＼の主格を補はなければなりません。日本文では左様な形式を整へるに及ばぬ。

『源氏物語』のような「流麗な調子」を持つ文章には、「日本文」本来の特長が生かされていると谷崎は考えていた。その特長を生かすためには「敬語」「主格」「文の終わり」を意識することが必要であった。これらを意識することで、なだらかな「流麗な調子」を持つ文章を綴ることが出来る。〈谷崎源氏〉にもこれらが意識されていたと考えられる。

#### 四 谷崎の好みの変化

谷崎は、「流麗な調子」について、次のように記している。兎に角、昔は文章を褒めますのに流暢だとか流麗だとか云ふ形容詞を常套的に用ひましたくらゐで、なだらかに読めると云ふことを第一の条件に数へましたが、今はカツキリとした、鮮明な表現を喜びます結果、さう云ふ書き方は流行後れの気味であります。けれども私かに思ひますのに、此れこそ最も日本文の特長を發揮した文体で

ありますから、願はくはこれを今少し復活させたいもの  
であります。

『文章読本』で強く主張されていた「日本文」のよさであるが、同書では、今の「日本文」は、「鮮明さ」ばかりが重視され、「西洋文」的な文章に傾きがちであることを指摘している。「西洋文」的な「日本文」では、何事も鮮明に不明瞭な部分がないようにするために、いたずらに文を重ねてしまふ。もともと鮮明に書くためには、文法的に不向きな「日本文」においては、意味を重ねるほど、かえって判りにくくなる。名文とはわからせる文、と考えていた谷崎は、「古典文」に教わる部分が多いと考え、名文を綴るためには、単純で口数の少なかつた「古典文の精神に復れと云ふことに外ならない」と語る。

しかし、「現代口語体の欠点について」において、谷崎自身はもともと西洋風の言い回しを好んでいたと記している。

正直のところ、美しい文章、ひびきのいい文章、——と云ふことよりも、先づ第一に西洋臭い文章を書くことがわれ／＼の願ひであつた。斯く云ふ私なぞ今から思ふと何とも恥かしい次第であるが、可なり熱心にさう心がけた一人であつて、有島氏のやうな器用な真似は出来な

かつたから、その反対に自分の文章が英語に訳し易いかどうかを始終考慮に入れて書いた。西洋人はかう云ふ云ひ廻しをするだらうか、西洋人が読んだらどう思ふだらうか、と、それがいつも念頭にあつた。

「有島氏のやうな器用な真似」とは、自分の文章を一度英訳し、再度日本語に直すことを言っている。谷崎は英訳こそしなかつたが、自分の文章が英訳しやすいかどうかを意識しながら、文章を書いていたという。「現代口語体の欠点について」では、西洋の「翻訳調」になつた「日本文」に対する懸念が示されている。文学の世界では、明治の言文一致体が推し進められたころから「翻訳調」が流行りだし、谷崎自身もそれに押し流されたという。

『文章読本』の中でも、過去に西洋臭い文章を書くように心がけていたことを明らかにし、西洋的な表現を目指していた頃の作品として、『中央公論』で一九二〇（大正九）年一月から一〇月まで連載していた『鮫人』をあげて、主語の多さ、無駄な表現の多さを指摘している。そして『鮫人』を書いていた頃を振り返り、「最初は正確に使ふ積りでゐましても、いつの間にか国文の本来の性質に引き擦られて、真似が（続かなくなるのであります。」と記している。

谷崎がいつごろから「日本文」のよさを意識し出したかを特定することはできない。しかし、『文章読本』の中で、「息の長い文章」を意識した作品を、一九三三（昭和八）年六月の『中央公論』で発表された『春琴抄』としている。『春琴抄』では、句読点の位置によって「一、センテンスの切れ目をほかす目的、二、文章の息を長くする目的、三、薄墨ですら〜と書き流したやうな、淡い、弱々しい心持ちを出す目的等」を主眼にしたという。これらの意識は「流麗な調子」を築く際の意識と通じるところが見られるため、少なくとも『鮫人』と『春琴抄』の間の、大正末から昭和のはじめにかけての十数年の間に、「日本文」への意識の変化があったのだと考えられる。

このような谷崎の「日本文」への意識の変化が、『源氏物語』に立ち返る理由の一つとなつていると考えられる。

西洋の「翻訳調」が主となり、谷崎の考えた本来の文法を失った現代文で、『源氏物語』という、国語の代表作品を表現する、それが〈谷崎源氏〉で試みられたことだつたと考えられる。

## 五 〈谷崎源氏〉で試みられたこと

一九三九（昭和十四）年一月に刊行された『潤一郎訳源氏物語』巻一「源氏物語序」の中で、谷崎は次のように記している。

此の書を読まれる方々にお断りしておきたいのは、これは源氏物語の文学的翻訳であつて、講義ではない、と云ふことである。云ひ換へれば、原文に盛られてある文学的香気をそっくりそのまま、とは行かない迄も、出来るだけ毀損しないで現代文に書き直さうと試みたものであつて、そのためには、原文の持つ含蓄と云ふか、余情と云ふか、十のものを七分ぐらゐにしか云はない表現法を、なるべく踏襲するやうにした。

谷崎が目指したのは「原文の文学的香気を出るだけ損なわないように」書かれた現代文の『源氏物語』であつた。この姿勢は「新訳」「新々訳」にも引き継がれており、一貫した翻訳姿勢が取られている。（谷崎源氏）を執筆するにあたり、谷崎自身が念頭に置いていた、根本にあるものと言えよう。

では実際に谷崎の訳を、他の訳文と比べて、その特長を指

摘してみた。

まずは、谷崎がこだわったセンテンスのあり方を、「夕顔」の巻の冒頭部分から見比べる。

次の文章は原文の引用文である。

六条わたりの御忍び歩きのところ、内裏よりまかてたまふ中宿に、大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりにけるとぶらはむとて、五条なる家たづねておはしたり。

この部分は、谷崎の「新々訳」では以下のように訳されている。

六条のあたりに人目を忍んでお通いの頃、内裏からそちらへお出ましになる中宿りに、大弐の乳母が重い病気で尼になったのを見舞ってやろうとお思いになって、五条にあるその家を探ねて、お立ち寄りになりました。

原文と同じく、冒頭部分でありながら、主語を伴っていない。

次に『新編日本古典文学全集』<sup>(5)</sup>の『源氏物語』の口語訳をあげる。

六条のあたりにお忍びでお通いになるころ、宮中からお出ましになる途中のお立寄り所として、大弐の乳母がひどくわづらって尼になっていたのを見舞おうとして、

五条にあるその家を訪ねておいでになる。

谷崎の訳と比べると「お忍び・お通い・お出まし」などの丁寧語が連なっている点や、「くとして」「くして」が連続し、単調な音が続く。谷崎の訳でも「くして」が連続している箇所はあるが、この訳と比べると、音で詰まることはない。センテンスとしては繋がっているのだが、谷崎の訳よりもだらだらとした印象を受ける。意味として通じることを主としてるので、文章としての美しさは問題にしないのであろう。

瀬戸内寂聴の訳では次のように訳されている。

源氏の君が六条のあたりに住む恋人のところに、ひそかにお通いになられている頃のことでした。その日も、宮中から御退出になり、六条へいらっしゃる途中のお休み処として、大弐の乳母が重い病気にかかり、尼になっているのを見舞ってやろうと思いつかれて、五条にある乳母の家を探ねていらっしゃいました。

「その日も」という原文にはない言葉を挿入していること、「源氏の君」という主語を加えていること、敬語の多さが、他の訳との違いとして見られる。終わりの音に「なり」「して」「り」「て」と交互に違う音を選んでいくことで、なだらかに読める。挿入部分や、センテンスをいくつかに分けてい

ること、他の訳よりも丁寧な印象を受ける。

次に、「若紫」の巻の中から、光源氏が若紫を垣間見る場面を取り上げ、地の文、会話文での言葉遣いの違いを比較してみた。

原文では次のように書かれている。

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるころあれば、子なめりと見たまふ。「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。

以上の原文の現代語訳を、谷崎の訳、『新編日本古典文学全集』の口語訳、瀬戸内の訳を並べ、筆者が注目する点に傍線を引いた。

谷崎の「新々訳」では次のように訳されている。

清らかな女房が二人ばかり、それから童どもが出たりは

いったりして遊んでいます。中に十ぐらいにもなるでしょうか、白い下衣に、山吹襲の馴れたのを着て、こちらへ走って来る女の児が、ほかの大勢の子供たちとは似るべくもなく、成人の後が思いやられる美しい器量をしています。扇をひろげたように髪をゆらゆらさせながら、顔を真つ赤にこすり立っています。「どうしたのです。子供たちと喧嘩でもしたのですか」と言って、尼君が見上げているのですが、すこし似通ったところがあるのは、大方親子なのであるかと御覧になります。「雀の子を犬君が逃がしてしまいましたの、伏籠に入れておいたのに」と、たいそう残念そうに言います。

『新編日本古典文学全集』の口語訳。

こざっぱりした女房が二人ほど、それから女童が出たり入ったりして遊んでいる。その中に十歳くらいかと思えて、白い下着に山吹襲などの着なれた表着を着て、走って来た女の子は、大勢姿を見せていた子供たちとは比べものにならず、成人後の美貌もさぞかしと思いやられて、見るからにかわいらしい顔たちである。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして、顔は手でこすってひどく赤くして立っている。

「何事ですの。子供たちといさかいをなされたのですか」と言つて、その尼君が見上げている顔だちに、少し似たところもあるので、これは娘なのかなと君はごらんになる。「雀の子を犬君が逃がしてしまったのです。伏籠の中にちゃんと入れておいたのに」と言つて、いかにも残念そうにしている。

瀬戸内寂聴の訳。

小ざっぱりとした年輩の女房が二人ほどもいます。ほかに女童が出たり入ったりして遊んでいます。その中に十ぐらいでしょうか、白い下衣に、山吹襲の着馴らしたのを重ねて、こちらへ走つて来た女の子は、そこにいたほかの子どもたちとは、似ても似つかず、成人した将来がさぞかしと思いやられるほど可愛らしい顔立ちをしています。髪は扇をひろげたようにゆらゆらして、泣き顔を真っ赤にこすつて立っています。

「どうしたの。子供たちと喧嘩でもなされたの」

と言いながら、尼君が見上げた面ざしに、女の子が少し似通つたところがあるのは、たぶん尼君の子なのだろうと源氏の君はお思いになります。

「雀の子を、犬君がにがしてしまったの、伏籠の中にし

っかり入れておいたのに」

と、女の子がさも口惜しそうに言います。

言葉の選択は執筆者の判断に委ねられるところであるが、谷崎の訳は、二つの訳文と比べて、原文の単語をなるべく踏襲するようにしている。

谷崎の訳では、原文の「きよげ」という単語を「清らかな」とし、『新編日本文学全集』、瀬戸内訳では「こざっぱり」「小ざっぱり」という訳となっている。また、原文の「童べ」を谷崎の訳では「童ども」とし、『新編日本文学全集』では「女童」とだけにし、瀬戸内訳では「女童」としている。原文での「似るべうもあらず」を谷崎訳は「似るべくもなく」とし、『新編日本文学全集』では「比べものにならず」、瀬戸内訳は「似ても似つかず」としている。また、原文での「美しげなる容貌」を、谷崎訳は「美しい器量」とし、『新編日本古典文学全集』では「かわいらしい顔立ち」、瀬戸内訳では「可愛らしい顔立ち」としている。

谷崎の訳では、古典文と現代文での意味のズレが少ないようであれば、原文そのままの単語を使用していること、また原文の単語では説明不足となつてしまう点はある程度無視していることがわかる。

しかし、これも徹底しているわけではなく、原文では「口惜し」となっている単語を、谷崎、『新編日本古典文学全集』では「残念そう」として、現代の感覚に近い単語を選んでいますが、これを瀬戸内では「口惜しそう」とし、原文の言葉を残している。「残念そう」と「口惜しそう」では、若干のニュアンスの違いがあるため、谷崎は「口惜しそう」という言葉は、その場面に当てはまらないと判断をしたのだろう。

主語の点では、谷崎は一貫して「源氏の君」「君」という主語を立てずに描写しているが、『新編日本古典文学全集』では「君」と入れている。この部分は「ごらんになる」とあるので、谷崎の立場から見れば不必要と考えたのだろう。瀬戸内訳では「女の子」という主語もあり、なるべく主語を明記する手法で通している。

また、若紫の泣き顔であるが、原文では泣き顔と明示されていないにも関わらず、瀬戸内訳では赤い顔を「泣き顔」としている。他の訳には見られない挿入部分である。

谷崎訳では「こすりこすり立っている」という、今まさにこすっている動作を表しているのに対して、『新編日本古典文学全集』では形容詞的なニュアンス、瀬戸内訳ではどちらとも取れる書き方をしているという違いも見られ、細かいこ

とながらも興味深いところである。

原文での「いと」のような副詞がそれぞれの訳者によって異なり、細かな言葉の選択は、それぞれの訳者の個性が表れるところであろう。

おそらく、訳者の個性が最も発揮されるのが会話文かと思われるが、谷崎の訳での若紫は「逃がしてしまいましたの」というほかの訳と比べても丁寧な言葉遣いをしている。

谷崎の訳では原文の単語で意味が通るようならば、そのままにしていることを指摘したが、「美しい器量」となっていると、会話文もあわせてみると、幼い若紫の様子がとても大人びて感じられ、谷崎の若紫へのイメージの違いが感じられる。原文に忠実とされる谷崎の訳であるが、おそらく多くの読者の若紫のイメージは、瀬戸内訳に近いと思われる。現代語訳の相違点から、それぞれの訳者の持つ登場人物のイメージの違いもうかがうことが出来る。

以上、二つの例示の分析をまとめると、谷崎の訳は『新編日本古典文学全集』の口語訳と近い性質が見られるが、こちらの訳よりも更に原文を読んでいる調子に近い。語句の使用方も現代語に移す際に、意味が通じるようならばそのままにしている。

しかし、そのために原文を読んでいるときの難しさは残っている。この点は谷崎自身も意識はしていたようで、わかりやすくすることよりも、原文のなだらかさを再現しようとした結果であろうか。瀬戸内訳が一番親切でわかりやすく、気軽に読むことが出来る。

よほど古典文学に親しみがあっても、解釈を必要としないですらすらと読むことは難しい。ある程度の知識さえ持ち合わせていれば、谷崎の訳を読むことで、原文そのものを読んでいるような、なだらかさを感じることが出来るようになっていく。

谷崎はあくまでも原文の文章の調子を伝えようと試みて、訳に取り掛かっている。この点が他の現代語訳を成し遂げた作家との違いであるといえるだろう。

### 〔注〕

- (1) 「旧訳」(「潤一郎訳源氏物語」と呼ばれる最初の訳は、一九三五(昭和十)年九月～一九三八(昭和十三)年九月に執筆、一九三九(昭和十四)年一月～一九四一(昭和十六)年七月に刊行される。全二十六巻。「新訳」(「潤一郎新訳源氏物語」のちに「潤一郎訳源氏物語」に改められる)は、一九四九

(昭和二十四)年五月ごろから下準備を始め、一九五一(昭和二十六)年三月～一九五四(昭和二十九)年十二月に執筆、一九五一(昭和二十六)年五月～一九五四(昭和二十九)年十二月まで刊行。全十一巻。「新々訳」(「潤一郎新々訳源氏物語」)は、一九六三(昭和三十八)年秋頃より修正され、一九六四(昭和三十年)年十一月～一九六五(昭和四十)年十月まで刊行。全十一巻。すべて校閲者や協力者を交えた執筆で、中央公論社から刊行された。

(2) 千葉俊二編『谷崎潤一郎必携』(二〇〇二・四、学燈社)

(3) 伊吹和子『われよりほかに―谷崎潤一郎最後の十二年』(一九四・二、講談社)

(4) 谷崎松子『倚松庵の夢』(一九六七・七、中央公論社)に収録。

(5) 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集20 源氏物語①』(一九九四・三、小学館)

※谷崎の作品の引用文は、一九八一年から中央公論社から刊行された『谷崎潤一郎全集』に拠る。引用の際、漢字は新字に直し、旧仮名遣いはそのままとした。また、『文章読本』からの引用では傍線部分もそのままにしてある。

— 本専攻修士課程在学 —